

## 嬉野のこと、空襲のことなど

岡本浩人（当時、加東郡社町在住 10 歳頃の話）

社町には機銃掃射はなかったが、B-29 が頭の上を飛んだことは何回かあった。八十機、百機というような大編隊で、私が見たことのある飛行機とは大きさの桁が違っていた。とても大きくて、低空飛行をしているのが見た目で見えた。

B-29 の編隊が頭上を飛んだ時には、大きな爆撃機の音がして、何曜日だったのかは定かではないが、二階へ飛んで上がって見た。大編隊が鶉野の方を向いて飛んで行ったが、下から高射砲でポーン、ポーンと撃ち上げるものの、B-29 には届かないまま、パーン、パーンと爆ぜていた。それを見て、情けない気持ちになった。高射砲も届いていないし、B-29 は悠然と飛んでいる。もう負けた、これでは勝てない、こんな相手と戦っているのか、と。その当時、私たちが教えられていたのは、今は敵軍を引き寄せている。本土へ引き寄せて本土決戦だ、本土でやっつけてしまうんだ、ずっとそう聞かされて信じていた。作戦なんだと納得してしまう。今の人は笑うかもしれないが、上意下達の一辺倒の戦時下では本当にそうになってしまうんです。

高射砲は、鶉野にそういう設備があったらしい。方角からいって、他所にそんなものがあるところはないと思う。

B-29 の大編隊を頭上にはっきりと見たのは昼間だった。時間はわからないが、編隊のモノモノシサは今でもはっきりと映像として浮かぶ。一方、夜間の姫路の空襲の時には轟音を聞いた。翌早朝、西方の空が茜色に染まっていたのを見た記憶がある。

小学校で先生が朝、社駅の手前の貝原の子たちが、田んぼへ逃げて堤の下に隠れたとか、戦闘機の兵士にバリバリと撃たれたという話をしていた。だから気をつけろということだったが、防空頭巾をかぶれという指示が出たぐらいだった。ぺしゃんこの綿帽子をかぶれと。笑ってしまうけど、登校する時には必ず首にかけていた。私たちも、学校から近いけれど、毎日手放すことは無かった。